

会員だより

初旅は名所巡りと

グルメと名湯を楽しむ

〈その一〉

コウノトリが
豊岡の名を持ってきた

令和二年の初旅は北近畿の豊岡〜天橋立〜城崎である。まず豊岡を紹介しよう。

コウノトリをデザインした駅舎の近くでレンタカーをし、手始めに「カバンの豊岡」の一点に立ち寄った。すれ違った市バスは車全体にカバンの絵が描かれている。次が「コウノトリの郷公園」である。



コウノトリのデザインの豊岡駅舎

1955年保護運動展開、2組4羽から始まったコウノトリが今では約180羽、8羽が園内で飼育されて、放鳥された中、韓国にも渡った記録がある。周辺の住民の薬剤制限や湿地帯

の保護などためめ努力に他ならない。



コウノトリの郷公園舎

郷公園では園内の8羽の為に、10時に餌を撒かれるので、近辺で生活するコウノトリもおこぼれにあやからうと里帰りするから、良い写真が撮れますよと、古い茶店のおじいさんが教えてくれた。

10時に来るとはちよつと無理か。グルメ1号、ここのおばあさんが作るあごだし汁の卵うどんがほっこりと体の芯から温めてくれる。



连带感がゆったりと過ごすコウノトリたち

豊岡の郊外にある沢庵寺は正式な名は宗鏡寺(すきょうじ)、1392年山名氏に

より開祖、山陰随一の伽藍を誇っていたが、信長による平定で荒廃、後に三代將軍家光の近侍した沢庵和尚が1656年、廃寺近くになつていた当寺を再興させた。その時に出した大根貯え漬けを家光が喜び、「たくわん」と名付けたと伝わる。今も地元の小学生と冬に沢庵づくりが行事になっている。



沢庵和尚の木像

現代の黄色い沢庵ではなかつた筈。この寺は山全体が庭か境内か判らぬほど広く、立派である。和尚は作庭の名士でもあり、鶴亀の庭、夢見の鐘、秀吉の家来の志野佐助が朝鮮から持ち帰った椿の佐助の原木がある。豊岡市出石の城主だった仙石家の菩提寺でもあり、和尚の死後、慕われて江戸より故郷である当寺に墓所が作られた。今も墓石が静かに出石を見守っている。

〈その二〉
信州より仙石家が
出石に蕎麦文化を呼んだ

豊岡市内から自動車です約30分、市内ながら全く別文化を持つ但馬の小京都と言われる出石町がある。1706年信州より国替えとなつた仙石家の居城は山の上にあつたが、後に平地の出石城を造つた。明治4年の廃藩置県により出石県、豊岡県を経て、兵庫県に編入。その城も明治政府による廃城命令で今はなく、城跡公園の近くに、ガイドブックで良く紹介される辰鼓楼がある。



出石の辰鼓楼

明治4年より街の時計台としてその四代目が今も時を刻む。近くに家老屋敷を再現し、当時の大名行列の道具や不意の襲撃に備えた隠し二階の構造を見ることが出来る。町内には近畿最古の芝居小屋(明治34年創建)「永楽館」が当時のままに復元されており、地域の人の造詣の深さを感じた。去年も片岡愛之助の公演がこちらで催された。出石と言えば全国から蕎麦ファンがやってくる町である。私達が着いたのはちょうど昼時、そば店の店先に列をなしている。町内には約50軒あるらしいが、正月明けで休んでいる店が多く、心配したが、老舗が開いていた。注文は勿論、皿そば。



出石名物皿蕎麦 基本二人分

ただで、麓にある智恩寺は1946年創建の日本三文珠の一つ、この歳にしてさらに智恵を授かるよう参拝した。多宝塔は室町時代の建造物で国の重要文化財というから有難い。その夜は湯の町カニ料理の町「城崎」に宿をとる。約1400年前にコウノトリが傷を癒していたと伝わる湯の町は最近浴衣姿で街中を湯めぐりで散策する姿がインスタ映えすること、人気がでている。だが我が孫とその友達に旅館内のゲームとカラオケに興じていた。まあ目の届く範囲で行動しているので安心かと大人は気持ちよく床に入った。



城崎湯の町 大ひろ川の両脇に老舗の旅館と外湯めぐり

小皿に入った美味しそうな蕎麦5皿に玉子と薬味に程よい濃さのつけ汁で、あつという間にいただく。主人は2皿追加。食後、街を散策、気が付けば昼時ソバ店に並んでいた人達はどこへ行ったのか、街中は閑散としていた。豊岡から一路、天橋立へドライブ、早速モノレールで展望スポットへのぼり、古来より絶景を眺めるスタイルの股覗きで飛龍観を見つた。約3.6kmの天橋立は昔と変わりない事をたしかめた。記・写真…上村サト子